

【応募部門】テレビドラマ部門

【作品テーマ】ホームドラマ

【想定尺】120分

【タイトル】登る

【あらすじ】

翠川潤（25）はボルダリング日本代表選手。  
針山京平（32）の子供を妊娠し、競技を優先  
したい潤は墮胎を決める。

7年後、裁判所。潤と京平は離婚調停中。  
焦点は息子の針山纏（9）の親権。7年前、墮  
胎を考えていた赤ん坊は産まれ、今は潤にと  
ってかけがえのない存在になっていた。

潤を阻む最大の障壁は、義理の母親で宗教  
団体の教祖・針山京子（91）。京子は纏を後継  
者にしようとする。潤の邪魔をする。

裁判所の待合室で、京子から纏を無理矢理  
取り返そうとした潤は、暴行容疑で逮捕。

一週間後、釈放された潤は、1カ月前まで  
針山と纏と暮らしていたマンションへ。

「纏はどこ」

潤は、針山を脅すも居場所がわからない。  
潤は、纏のことで頭がいっぱいで、パトカ  
ーでマンションまで送ってもらおう時、何故、  
街に一台の車も電車もおろか、人っこ一人歩

いていないのか気づいていなかった。  
そしてバツタの大群が襲来する。潤は、極度のバツタアレルギーで、針山と一秒でも早く別れたいのに、街がバツタでいっぱいになったため、一緒にいる羽目に。しかもバツタは電線を食いちぎり停電。季節は真夏である。  
針山は、潤に末期がんで余命3か月であると告げる。潤は、病院に連れていこうとするも、針山は生きることが諦めている。  
潤は、纏と一緒に育てている屋上菜園のプラントーを取りにいこうとするが、階段はバツタでいっぱい。まだバツタがいないマンションの外壁を上ることに。落下して左腕を負傷する潤。なお悪いことに、京子が纏を連れて、裁判所の屋上で宗教の儀式をしていることを知る。建物は施錠され、登れるのは通気口だけ。潤はさらに登りにくい建物を片手で上り切り、纏を助け出す。  
纏は、街中にまかれた殺虫剤を吸い意識がない状態。潤は必死になって纏を蘇生する。

【登場人物表】

翠川（針山）潤（25）（32）（33）

元ボルダリング日本代表

針山京平（32）（39） 潤の夫

針山纏（6）（7） 潤の息子

針山京子（60）（67）（68）

針山の母・宗教団体教祖

里中芳郎（34） ボルダリングのコーチ

大倉亮二（46） 警察官

トクリポーター

カメラマン

京子の信者たち

京子の弁護士

○スポーツクライミング・会場

クライミング競技の一つ、スピード。

ウォールが聳え立っている。

里中の声「潤。いいか、これに勝ったら世界

チャンピオンだぞ」

潤の声「はいッ」

○同・舞台袖

翠川潤（ニ）日の丸が袖についたユニ

フォームを着ている。

里中芳郎（ニ）、潤の隣で、日の丸のジ

ヤージを着て立っている。

里中「準備はいいか？」

潤「はい」

里中「勝つのは誰だ」

潤「私だ」

里中「勝つのは誰だ」

潤「私だ」

里中「勝つのは誰だ」

潤「私だ」

里中「よし、行ってこい」

里中、潤の背中をたたく。

潤、両手を振りながら舞台袖から出ていく。大きな歓声が沸く。

里中「頑張れ。潤。あと一つ勝てば、初めての世界チャンピオンだ」

### ○同・スピード競技の壁

潤、まるで獣のように、物凄いスピードで壁をよじ登っていく。ホールドを掴む潤の指は、まるでワシの爪のような鋭さである。片手で、全体重をぐいぐいと持ち上げていく。

隣の壁に外国人選手。潤と競っている。場内から歓声や拍手。

実況の声「早い。早い、翠川」

潤、スパイトで対戦相手を抜き去る。残すは、ゴールのホールドのみ。

実況の声「翠川、一気に突き放したあ」

○同・観客席

観客席に針山京平（WN）熱狂する観客をよそに、一人心配そうに見ている。

○同・ウォールの頂上

潤、最後のホールドに手を伸ばす。そこに一匹のバツタが停まっている。潤の体が金縛りにかかったように動かなくなる。次の瞬間、獣から女子に変わる。

潤 「ぎゃああ。バツタあー」

潤、ホールドに触れないまま地面に落下（体は天井からワイヤーでつるされており、減速しながら落下）。観客から、ひととき大きな歓声。ゴールしたと思いい込んでいる。潤、だらんとしている。失神。両腕に鳥肌。ザワザワしだす周囲。

○同・会場（夕方）

観客の姿はなく、舞台を撤収するスタッフの姿。

○同・舞台袖（夕方）

潤、里中や同じ日の丸のジャージを着た数人の大人に取り囲まれ、怒られて泣いている。

里中「バカ野郎。バツタごときで」

潤「すいません」

里中「初めての世界チャンピオンだったんだぞ」

潤「すいません」

里中「お前は、ほんものの大馬鹿野郎だ。もう知らん」

潤、泣きじゃくっている。

里中「まったく。どうしようもない奴だ」

里中たち、潤から離れていく。

潤、しゃがみ込んで泣く。誰も潤のそばに近寄ろうとしない。

針山の声「潤ちゃん」



潤、顔をあげると針山が立っている。  
さっきの大人たちとは対照的な笑顔。

潤「京平くん！」

潤、針山の胸に飛びつく。

針山、潤の勢いで後ろに倒れる。

潤、針山の胸の中で、

潤「だって、怖かったんだもん」

○（回想）同・ウォールの頂上

ウォールに止まる一匹のバツタ。

○元の場所

針山、潤の背をそっと抱く。

針山「そうだよね。バツタ、嫌いだもんね」

潤、何度もうなずき、

潤「世界で一番嫌い」

針山「そうだよね。そうだよね」

潤「みんなが責める」

針山「潤ちゃんは悪くないよ」

潤「ほんと？」

針山「うん」

潤「ほんとに悪くない？」

針山「うん」

潤「もつとギユってして」

針山「うん」

針山、腕に力を籠める。

潤「もつと」

針山「うん」

潤「もつと強く」

潤、幸せそうな横顔。

○スポーツクライミングのジム・室内

潤、壁に備え付けられたトレーニング

ボードに両手の親指一本だけかけ、全

体重を持ち上げて懸垂をしている。

里中、後ろで腕組みをして見ている。

里中の声に合わせて潤が懸垂。

里中「じゅうはちー、じゅうくうー」

潤の指から突然、力が抜け、床の上に

落ちる。

里中、慌てて潤に駆け寄る。

里中「おい。どうした？潤、潤」

周りにいる人達が駆け寄ってくる。

だんだん大きくなる救急車の音。

○病院・病室（夜）

潤、ベッドで寝かされている。

潤、天井に向かって目を開けている。

○同・廊下（夜）

白衣を着た老齢な男性が、満面の笑顔

で針山と握手をしている。

針山の表情は笑顔だが、固い。

○同・病室（夜）

針山、入室。

潤、ベットであおむけになり、天井を

まっすぐ見ている。

針山「潤ちゃん、大丈夫？」

潤「私、産まないから」

針山「え？」

潤「今が一番、大事な時期なの」

針山「でも……」

潤「（遮って）一秒も無駄にできない」

潤、立ちあがろうとする。

針山、慌てて駆け寄って、

針山「ダメだって。潤ちゃん」

潤「離して」

潤、針山を跳ね飛ばす。

針山、壁に頭をぶつける。

針山「あいたあ」

潤「今ごろ、他のみんなは練習してる」

潤、自分の腹をみつめる。

針山、頭をおさえて苦しんでいる。

潤「こんなものッ、邪魔でしかない」

潤、自分の腹を苦々しく見つめる。

針山「……潤ちゃん」

潤「なんで、こんな大切な時に、何で……」

針山「潤ちゃん。ぼくと結婚しよう」

潤、針山をまっすぐ見て、

潤「結婚はする」

針山の顔が輝く。

潤「でも、今、子供はいらない。絶対」

針山「じゅ、潤ちゃん」

潤「今は、クライミングのことだけ考えたい。

クライミングのことだけ考えたいの」

潤、顔を覆って泣き出す。

針山、おろおろするばかり。

どこからともなく一匹のクラスが飛ん

できて、ベランダに停まる。窓越しに

二人を見ている。

○新宿歌舞伎町・一番街の目抜き通り

曇天。

クラス同士がゴミをあさり、争って  
いる。傍を通った女性を襲うクラス。女

性は悲鳴をあげて逃げる。

京子の声「クラスは、悪くありません」

○同・公園

針山京子（90）公園の真ん中で、真っ黒な服を着て立っている。髪も黒く染め上げている。（以降、衣装は同じ色）

○同・目抜き通り

京子の声「人間のせいで、悪者になっただけです」

○同・公園

京子「カラスは、ただ生きようとしているだけ。私たちと同じように」

京子のそばに、マイクを持った若い女性とテレビ局のマークがついた業務用のカメラを抱えた男性が立っている。京子、両手を広げる。どこからともなく次々とカラスが飛来。二人とも、続々と集まってくるカラスを気味悪がっている。一羽、京子の右腕に止まる。京子、カラスの頭をなでる。

京子「それがどうしてわからないのかしら」  
リポーター（女性）「カラスが、太陽の神様の  
使いなんですか？」

京子「その通りです」

公園の入り口に、京子と同じ全身真っ  
黒なコーデの女性が数人立ち、京子の  
ことを羨望の眼差しで見ている。

京子「カラスは、太陽の神様、太陽神様のお  
告げを、私たち人間に伝えにきてくれてい  
るのです」

女性「カラスで、未来がわかると聞いたんで  
すが？」

カラス達がぎゃあぎゃああと鳴く中、  
京子「ええ、その通りです」

空は、相変わらずの曇天である。

京子、空を見上げる。

画面上に週刊誌の見出し。

見出し「カラスの奇跡!? 鳥取の地

震を予知」

見出し「カラス信仰はホンモノか?」

見出し「またまた奇跡 信者が10万人を突破」

京子の周りにどんどんカラスが集まってきた、公園の周りを取り囲む黒服の人達が増えていく。年齢や性別も様々。肌の色が違う人たちもいる。

ぱーっと公園に差し込む陽光。

京子を取り囲む人達が拍手をする。

信者たち「太陽神様、バンザイ。太陽神様、バンザイ」

京子、満足そうに微笑む。

### ○家庭裁判所・全景

T・「7年後」

「裁判所」と刻まれた石碑。

### ○同・面談室

針山潤（32）の向かいに中年の男女が座っている。

男性「これで終わります。最後に何かござい



ますか？」

潤「あの人と別れたい。それだけです」

男性「わかりました」

潤「それから」

潤、立ちあがり、

潤「どんなことがあってもあの子だけは」

中年の男女、潤の勢いに気おされる。

### ○同・待合室

針山京平（36）椅子にも座らず、部屋の  
中をソワソワソワソワ歩き回っている。

針山纏（9）部屋の隅にあるソファにち  
よこんと座っている。

纏、針山のことをチラチラ見るも、針  
山は纏などいないかのようにうろ  
うろしている。

潤の声「あの子だけは渡しませんからッ」

針山「どうしよう：どうしよう」

### ○同・駐車場

黒塗りの車が何台も停まる。  
車と並走するように、カラスが何匹も  
ついてくる。

針山京子（67）、車後部座席からおりて  
くる。京子と一緒に降りた人間も同じ  
服装をしている。

カラス達が傍に降り、ガーガーと鳴く。

○同・待合室

ドアが開く。京子が入ってくる。

針山「お、お母さま」

針山、京子に駆け寄っていく。

京子、針山をひしと抱き寄せて、

京子「大丈夫、大丈夫よ京平ちゃん。可愛そ  
うに。こんなに震えちゃって」

針山「どうしよう。どうしようお母さま」

京子「大丈夫。すべて上手くいくわ」

針山「でも…でも」

京子「大丈夫。お母さまがついてるから」

針山、涙目で何度もうなずく。

京子「纏ちゃん。大丈夫だからね。おばあ様がゼーんぶ解決してあげるから」

纏、京子を見上げて、泣き出してしま  
う。

京子「大丈夫よ。大丈夫だから」

京子、針山を離して纏のところへ行こ  
うとする、

針山「あ、お母さま」

京子「大丈夫だから。あなたは何かやべら  
なくていいの。ウチの弁護士が何かも処  
理してくれるから」

○同・廊下

革製の鞆を片手に立つスーツ姿の中年  
男性。

○同・待合室

京子、針山を抱き寄せて、

京子「絶対、あんな女の好きにはさせないわ」

針山「う、うん」

京子「だから言ったでしょう。あんな女やめ  
ときなさいって」

針山「う、う」

京子「お母さまの言うことを聞かないと、こ  
ういうことになるの。わかった？」

針山「うん。ごめんなさい」

京子「京平ちゃんは、お母様の言う通りにし  
てればいいの。そうすれば、何もかもうま  
くいくんだから」

男性「ドアが開く。廊下にいた男性が、  
京子「京平ちゃん、行くわよ」

針山「で、でも……」

京子「大丈夫だから」

針山「お母さまも来て」

京子「ダメなの。いけないの」

針山「ど、どうして」

京子「離婚調停は、そういう決まりなの。途  
中まで行くから。ね」

針山「ぼ、ぼく……怖い」

京子「京平ちゃん。京平ちゃんには、いつも

お母さまがついてる。だから安心しなさい」

針山「でも……でも……」

針山、京子に肩を抱かれて出ていく。

纏、ひとりぼっちで泣いている。

窓が開いている。一匹のカラスが窓の

棧に止まり、纏に向かってカーカーと

鳴く。

纏、顔をあげてカラスを見る。

カラス、威嚇するようにカーカー鳴く。

纏、嫌がるどころか笑顔になる。立ち

あがって近づいていくと、小さな手を

伸ばし、カラスの頭をなでる。カラス、

鳴くのを止めて心地よさそうにしてい

る。

○ 同

潤、入る。あ、となる。

纏の隣で、纏の肩を抱いて座る京子。

カラスはいなくなっている。

京子「何しにきたの」

潤「帰ります」

京子「どうぞご勝手に」

潤「纏を、返してください」

京子「まだあなたのもものと決まったわけじゃないわ」

潤「纏は私の息子です」

京子「私の孫でもあるわ。そして、教団の正統な後継者でもある」

潤「纏は、道具じゃない」

京子「京平ちゃんは、残念だけど太陽神様が許してください。さらなかつた。でも、この子は違う」

京子、纏の肩を抱く。纏の困惑した顔。

京子「太陽神様が選んでくださったの」

潤「纏を返して」

京子「よく言うわね。あなたは、この子を殺そうとしたのよ」

纏の表情が固まる。

潤 「う、ウソ。そんなの」

京子 「京平ちゃんがいなかったら、この子は殺されたた。あなたによつて」

潤 「ち、違います」

京子 「どこが違うの。どこがどう？」

潤 「う：う」

潤、纏を見る。纏、目を合わせようとしない。

その時、窓の棧にカラスが止まる。一

羽、二羽、三羽と続く。潤を威嚇する

ように鳴く。

潤、カラスに身を固くする。

京子 「出ていきなさい。人間の皮をかぶった

悪魔め」

潤 「纏を返して」

潤、京子に近づいていく。

京子 「誰かきて。誰かあ」

カラスが部屋の中を飛び回る。窓から、

次々とカラスが入ってくる。

潤も悲鳴をあげる。

○同（夕）

床の上に落ちているカラスの羽。  
画面上に新聞記事の見出し。  
見出〔元ボルダリング日本代表選手、  
暴行容疑で逮捕〕  
見出〔息子を取り戻すため？義母に暴  
行容疑で現行犯逮捕〕

○警察署・全景（朝）

T・「一週間後」  
雲ひとつない空。快晴。

○同・駐車場（朝）

潤、警察官の大倉亮二（ㇿㇿ）と一緒に  
出てくる。乗用車が数台停まっている  
が、1台を除き、すべて嚴重にカバー  
がかけられている。  
潤、壊れたスマホをもって立っている。  
大倉、パトカーの運転席を開けると、  
潤に向かって、



大倉「早く乗って。急いで。急いで」

○パトカーの車内（朝）

大倉、サイレンを鳴らして運転している。

潤、まっすぐ前を向いている。その顔は怒りで満ちている。

歌舞伎町の一番街の前を通る。有名な一番街アーケードの電飾が消えている。

人が誰もいないばかりか、車1台通っていない。商店はすべてシャッターを閉じており、信号機だけが明滅。潤、そのことに全く気づかない。

○針山の住むマンション・全景（朝）

○同・屋上（朝）

快晴。

屋上菜園。プランターの上に色とりどりの野菜がなっている。

赤々としたプチトマト。土の上に差し込まれたプレート。幼児の字で「まといとママの」と書かれている。風に揺れる葉や実。ビル街の向こうに都庁が見える。

○同・一階にある針山の部屋・ダイニングルーム（朝）

針山、4人掛けのテーブルに一人で座っている。テーブルの上にスマホ。針山、放心した顔で中空を見ている。食器棚のガラス戸に映る自分の表情にはつとなり、自分の口角を無理矢理両手で持ち上げ、

針山「さあ、笑顔、笑顔。幸せが逃げちゃうぞ」

インターフォンが鳴る。  
針山、驚く。  
インターフォン、何度も何度も鳴る。

○同・玄関（朝）

針山、ドアを開ける。

大倉と潤が立っている。

潤、何も言わず土足のまま入っていく。

大倉「あ、ちょっと」

針山「え？え？」

針山、振り返る。

大倉「あ、どうも。新宿署の大倉です」

針山、大倉を見る。

大倉、警察手帳を針山に見せる。

潤の声「纏。纏」

大倉「すいません。ニュースなんかで知っていると、思います。緊急事態ですので、こちらにお連れしました」

針山「え？え？でも？」

潤の声「纏。どこにいるのッ」

大倉「とてもじゃないけど、（部屋の奥を見て）

お住まいの小金井まではいけませんよ」

針山「え？でも、でも…あ」

針山の顔に怯え。

潤、針山の胸倉をつかむと、

針山「うわぁ」

潤「纏はどこ。どこにいるのッ」

大倉「何してんだッ」

大倉、潤を針山から引っぺがそうとするも、うまくいかない。

潤「纏はどこ？どこにいるの」

大倉「おい。また逮捕するぞッ」

針山「く、くるしい。助けてえ」

大倉「クツ、なんて力だ」

潤「どこだ？言え。どこ」

針山「死ぬ。死ぬう」

大倉「いい加減にしろお」

大倉、潤を引っぺがした勢いで玄関から転げ出て、外廊下に潤もろとも飛び出してしまう。

大倉、廊下の隅に後頭部をぶつけ、潤を持つ手から力が抜ける。

潤、玄関先でへたりこんでいる針山に、また飛びかかっていく。

針山「ぎゃああ」

潤「纏はどこ？どこ？」

大倉「拳銃を取り出し、

大倉「いい加減にしろ。撃つぞ。おい」

針山「ママ、ママ。大変、たいへん。ピストル、ピストル」

潤「どこにいる？言え、言え」

大倉「拳銃を抜いたまま茫然。拳銃をホルダーに戻し、

大倉「ああ、もう」

○同・ダイニングルーム

潤「椅子に座らされている。しかも手と足をそれぞれ別の縄で縛られ、柱に括り付けられている。ちなみに靴は脱がされている。

フロアリングのあちこちに潤の足跡。  
針山「部屋の隅で怯えている。

大倉「ひとまず、これで」

大倉「玄関につづく廊下へ歩いていく。

針山「ちよ、ちよっと待ってください」

大倉「なんでしよう？」

針山「ま、まさか、いつちやうんですか？」

大倉「もちろん」

針山「でも……」

大倉「大丈夫でしょう。夫婦なんだから」

針山「もう別れるんです。ご存知でしょう？」

大倉「でもまだ、あなた方は夫婦だ」

針山「ちよ……ちよっ、待ってください」

大倉「大丈夫、昔は通じ合ってた。だから所

帯をもったんでしよう？」

針山「……もう、思い出せません」

大倉「うん。忘却もまた人間の一部分です。そ

れもまた悪くない」

大倉、廊下を歩いていく。

針山「ちよ、ちよっと刑事さん」

針山、追いかけていく。

○同・玄関

針山、大倉に追いつく。

針山「ちよつと」

大倉「え？私？」

針山「他にいないでしょう」

大倉「だって刑事って言うから。私は刑事じゃない。昔は憧れてたけどね……」

針山「（遮って）じゃあ、大倉さん」

大倉「チツ、物覚えの良い野郎だ」

針山「ぼ、ぼく、殺されちゃいますよ」

大倉「今は非常事態なのツ。いつ、奴らが来るかわからんのですよ？ご存じでしょ？」

針山「どうして、ココに連れてきたんです」

大倉「さつき言った通り。ご自宅の小金井なんて遠くて無理」

針山「だ、だからって」

大倉「それに息子さんに会いたって言うから。そりゃそうだ。母親だもんね。拘留中は、息子さんはあなたと暮らしてたんでしょ？」

針山「……はい」

大倉、三和土でしゃがみ込んで靴を履

きはじめる。

針山「こ、ここにいてください」

大倉「はい？」

針山「大倉さん。ここにいてください」

針山、大倉の腰にすがりつく。

針山「ふ、ふたりは嫌」

大倉「何言ってるの。夫婦でしょうが」

針山「だから、別れるんですって」

大倉「息子さんに会えば大人しくなるって」

針山「（小声で）今、お母さまと一緒にいるんです」

大倉「じゃあ、そう言いなさいよ」

針山「ちよ、声が大きい。ど、どこに行った

かまではわからないんです」

大倉「じゃあ、そう言いなさいよ」

針山「お、お願い。い、いかないで」

大倉「行く」

大倉、靴をはいて立ち上がる。

針山、腰に組み付いて離れようとしな  
い。



大倉「ああ、もう」

針山、ボタンと大きな音を立てて床に顔を打ち付ける。

針山、鼻血を出しながら顔をあげる。

針山の顔は涙でぐしゃぐしゃである。

針山「警察は、市民を守るものでしょう」

大倉「それもこれも、自分の命あってこそでしよう」

大倉、出ていこうとする。

針山「じゃあ、僕も行く」

大倉「あほか」

針山「僕もつれていってください」

大倉「いい加減にしろ」

大倉、また拳銃を抜く。

針山、動きが止まる。

大倉「撃つぞ。動くな」

針山「：いっそ撃って」

大倉「は？」

針山「どうせ、殺されるんだもん」

大倉「あのね：こっちは痛いよお」

針山「あっちはもっと痛い」

大倉「こっちの方が絶対痛いから」

針山「向こうは、体だけじゃない。まず、心を痛めつけられるんだ。立ち直れないくらい：徹底的に」

大倉「うん。別れて正解だね」

針山「だから、まだ別れられてないんですって」

大倉「それはまあ、裁判所で決めてもらって」

針山「今、その途中なの」

大倉「そりゃあ良い。万事順調じゃないですか」

針山「ひ、ひどい」

○歌舞伎町・一番街

相変わらず、人の姿はない。

大倉の声「それにしてもさ：」

○針山の部屋・玄関

大倉「漫画みたいな話だね。街にバ……」

針山「動こうとする。」

大倉「拳銃を向けて、

大倉「おっと、動くんじゃない。動くんじゃない

ないぞ」

針山「お、おまわりさん：お、お願い」

針山「ハラハラと涙する。」

大倉「あ、奥さん」

針山「え？」

針山「針山が振り返った途端、大倉がダツシ

ユで逃げていく。」

針山「あ、待って」

針山「裸足で玄関を出る。」

○同・外廊下

針山「針山、ばたばたと駆けていく。」

針山「待って。待ってえ」

針山「針山、角を曲がろうとして、途中で立

ち止まり、振り返る。」

開いたままのドア。」

○同・屋上

快晴。

プランターの中のプチトマト。

風に揺れてこすれる葉の音。

○針山の部屋・ダイニングルーム

潤、縄で縛られている。

針山、恐る恐る戻ってくる。

針山「あ：あの、怒ってる？怒ってるよね」

潤、顔を上げる。

潤「とりあえずほどいて？」

針山「で、でも：」

潤「じゃあ、ここでうんこする」

針山「え？それは困るよお。ルンバで掃除し

たばっかなのに」

潤「またルンバ使えばいいじゃん」

針山「お腹、ゆるい？」

潤「うん。だるだる」

針山「ルンバが壊れちゃうってえ」

潤「お母様を買ってもらえないよ。千個でも

二千個でも。もうかってんでしょ？」

針山「悩んでいる。」

潤「ほどけ」

針山「で、でも……」

潤「居場所知らないのわかったから」

針山「……え？なんのこと」

潤「どうせ、あの人に連れてかれたんでしょ」

針山「あ……いや」

潤「いいいから。嘘は」

針山「ぼ、ぼくが悪いわけじゃないよ」

潤「もう、そんなことどうでもいい。早くし

て。早くほどけ」

針山「恐る恐る潤に近づいていく。」

針山「縄の結び目を探す。」

潤「手がきつい」

針山「後ろ手で結ばれたところを見る。」

針山「外そうとするも上手くいかない。」

潤「なんかで切れればいいでしょう。包丁とか、

あるでしょ」

針山「あ、そっか」

針山、キッチンの棚から包丁を取る。  
潤「手、切ったら殺すから」

針山「う、うん」

針山、包丁を持つ。きらりと光る刀身。

潤「何？殺そうとしてる」

潤の鋭い視線。

針山「ま、まさか：そんなわけないよ」

針山、しゃがみ込んで潤の腕の所へ。

× × ×

腕縄が切られている。

針山、部屋の隅で包丁を持って震えて

いる。

潤、自分で足の縄をほどくと、針山の

方も見ないで玄関の方へ歩いていく。

針山「あッ」

潤、立ち止まる。でも振り返らず、

潤「何？」

針山「どこ、行くの？」

潤「あの人のところ」

針山「え？：で、でも」

潤 「それに、一瞬でも、あなたと同じ空気吸  
つてたくないんで」

針山 「で、でも：」

潤 「でも何？ どうしてちゃんと自分の意見が  
言えないの。なんでいつもそうなの」

針山 「ご、ごめん：でもね」

潤 「「ごめん」も「でも」も止めて。結論から  
言って」

針山 「ニュース見た？」

潤 「は？ 何なの？」

○ 同・外廊下

壊れたスマホが落ちている。

○ 同・ダイニングルーム

針山 「ご、ごめん。でも、今は無理だよ」

潤 「なんで？ どうして？ 理由は」

針山 「く、くるんだ：」

潤 「は？」

針山 「く、くるの。アレが」

○新宿歌舞伎町・一番街のゴミ置き場

無人の街に、カラスが降りてくる。  
ゴミがなく、戸惑いがちに首をひねる。  
一匹のバツタが降りてくる。  
カラス、ぱくつとバツタを食べる。す  
ぐそばに別のバツタが降りてくる。  
たくさんのカラスの鳴き声が近づいて  
くる。

潤の声「もういいから。黙って」

○針山の部屋・ダイニングルーム

針山「ご、ごめん」

針山、うなだれる。

潤、針山を見下ろして吐き捨てるよう  
に、

潤「ほんと最低最悪。なんで、纏はあなたに  
似ちゃったの」

針山、苦笑い。

潤「何も何かも。すべて。まるでクローンみ  
たいに」



針山「…だってぼくの子だもん」

潤「私の子でしょッ」

針山「うわぁ、ごめんって」

潤「神様って、ほんとやな奴」

針山「えへへ。だよね」

潤「ぜんぜん笑えない。笑う要素がない」

針山「…」

潤「ここは謝りなよ」

針山「あ、そっか…ごめん」

針山、潤を上目で見る。

針山「ごめん、ごめん。ごめんなさい」

潤、ため息をつく。

潤「人の顔色ばかり気にして、自分の気持

ちがちゃんと云えない」

針山、潤のことを見る。

潤「自分の気持ち」

○（回想）針山の部屋・外廊下（夜）

T・「1カ月前」

潤、ポストンバッグ片手に出てくる。

反対の手に、パジャマ姿の纏。  
潤、怒った顔でずんずん歩いていく。  
纏、潤の歩くスピードに合わせてるのに  
必死。  
針山、開いたままのドアから恐る恐る  
顔を出す。

○（回想）電車の中（夜）

纏、恥ずかしそうにうつむく。キャラ  
クタ―ものの運動靴を履いている。  
纏のパジャマ姿を見て笑う乗客たち。  
潤、まっすぐ前だけを向いている。

○（回想）ネットカフェ・個室内（夜）

潤、泣いている纏に話しかける。

潤「だからね。これからママと二人で暮らす  
の。パパなんかいらないうね？あんな情け  
ない人、もういらないうね？纏も、そう思  
うよね？」

纏、答えない。

潤「大丈夫だから。ママ、ちゃんと働くから。  
ね、だから大丈夫だから。纏。聞いてる？」  
隣の個室の男性の声「うるさいな。ちよつと  
静かにしろよ」

潤「うるせえ。こっちは大事な話してんだよ」  
纏の体が固まる。

隣の声「どつかよそでやれ」  
潤「うるせえ。黙れ」

潤、隣の壁をガンと蹴る。

纏の顔に怯えが走る。

向こうから蹴り返す音。

潤、怒って部屋を出ていく。その時、

勢いあまって纏の足を踏む。

纏、痛みに顔をゆがめる。

潤、気付かず出ていってしまふ。

× × ×

纏、横になっている。

潤、纏の顔を覗き込む。纏は声もなく

泣いている。

潤、纏の顔をまた覗き込む。

纏、潤の方を見ないで、  
纏「ママは、ぼくなんて、産まれてこなければよかった？」

潤「：な、何言ってるの」

纏「おばあちゃんが言ってた」

潤「う、ウソ。そんなの嘘だからね」

纏「嘘？」

潤「嘘。絶対に嘘」

纏「ほんとうに？」

纏、まっすぐ潤を見あげる。

纏、ついに目をそらしてしまう。

纏、また潤に背中を向けて、

纏「ぼく、ママといたくない」

潤の表情が固まる。

ママといたくない、そのセリフが次の

シーンの冒頭までリフレインする。

## ○元の部屋

潤、顔を手で覆い泣き出してしまう。

声を殺して。

針山、まさか泣いてるとは思わず身構える。

針山「ママ？ママ」

潤「…」

針山「どうしたの？ママ」

潤「…」

針山「あれ？何？なんなの？」

針山、身を引く。

潤、鼻をすする。

針山「なんだ風邪か」

潤、顔を上げて、

潤「泣いてるのッ。わかんだろうが普通」

針山「うわぁ」

潤「どこまで鈍感なの」

針山「ごめーん」

針山、物陰に隠れる。

潤「なんで泣いてるか聞けよ。普通聞くだろ」

針山「なんで、泣いてるのお」

潤「うるさい。自分で考えろ」

針山「ええ…なんでえ」

潤「理由なんか1つでしょ」

針山「理由？」

潤「世界で一番大切な人のために泣いてるの」

針山、顔だけ出して、

針山「え？…ぼく」

針山、潤の般若のような顔を見て、

針山「わーごめーん」

潤「ま、と、い。纏に会えないから泣いてん

のッ」

針山「だ、大丈夫だよ。ママ。大丈夫」

潤「何が？何が大丈夫なの。どこがどう大丈

夫なのか教えて」

針山「纏のそばには、お母さまがいるじゃな

いか」

潤の表情が凍りつく。

○（回想）家裁・待合室の中

京子の顔。そして不安そうな纏の顔。

○元の部屋

潤、怒りと憎しみに満ちた顔。

針山「そんな顔しないで」

針山の顔に、初めて、潤に対するはつきりとした反抗の気持ちが浮かぶ。

針山「家族じゃないか」

潤「家族なんかじゃない」

潤、立ちあがる。

針山も、色をなして立ちあがる。

針山「ママッ」

潤「あの人は、私から纏を奪おうとしてる。

私の悪口を纏に言ってる」

針山「お母さまがそんなことするわけない」

潤「したよ。した。なんでわからないの？あ

の人は最低な人よ」

針山「ママ。ダメだ、人の悪口は」

潤「違う。あなたは、あの人の悪口だから怒

ってるだけ」

針山「違うよ。10年も一緒にいて、まだぼ

くのことがわからないのッ」

潤「あなたの基準は、あの人が、それ以外し

かない」

針山「そんなことない」

潤「私がそれ以外なのは良い」

針山「それ以外なんてないよ。みんな一緒だ。

どうして、わかってくれないの？ どうして  
お母さまと仲良くしてくれないんだ」

針山、ハラハラと泣き出す。

潤、さーっと引いていく。

針山「お母さまは、素晴らしい人なのに。ど  
うしてわかってくれないの？」

○（回想）ボルダリング会場・舞台袖

T・「7年前」

潤、針山に抱きしめられながら幸せそ  
うな顔をしている。

潤の声「間違いない。こんな素敵なお人、世界  
にたった一人しかいない」

針山「潤ちゃん。ごめん」

潤「どうしたの？」

針山「ごめん。何もしてあげられなくて」



潤「謝らないで。京平くんは、なんにも間違  
つてなんかいないから」

針山「でも、ごめん」

針山、泣き出す。

潤「どうして泣いてるの？」

針山「潤ちゃんがかわいそうで」

潤「京平くんは優しすぎるよ」

潤、京平に幸せそうに抱き着く。

潤の声「わたし、この人とずっと一緒にいる」

### ○元の部屋

潤、寒さに震えるように自分の体を抱  
いて、

潤「ほ、ほんと：気持ち悪い」

針山「え？何が？何が気持ち悪いの？ま、ま

さか、ぼ、ぼくのことじゃないよね」

潤「あなたしかないでしょ。この状況」

針山、シヨックを受けた顔。

潤「それに、あの人も、カラスも、あのおか  
しな教団も、ゼーんぶ。全部、ゼーんぶ。

ほんと汚点。人生の汚点。あなたに出会ったこと」

針山「シヨックを受けたまま動けない。潤、ちよつとスカッとした顔。

針山「で、でも…でもさ」

潤「何？」

針山「…でも」

潤「言いたいことがあるならばつきり言いなよ」

針山「そしたら、纏とも出会えなかったよ」

潤「…」

針山「チラチラと潤を見る。

針山「マ、ママ？」

潤「針山をにらみつけ、

潤「私は、あなたのママじゃない」

針山「え？」

潤「何回、ママママ呼ぶのよ」

針山「じゃあ…これから、なんて呼んだらいいの？」

潤の両手から力が抜ける。

潤「：私たちのどこに、これからがあるの？」

針山「：そっか。そうだよね」

潤「帰る」

針山「あ：うん」

潤、何も言わずに部屋を出ていく。

○同・ダイニングルーム

テーブルの上においてあるスマホから警戒音が鳴る。

機械音「緊急警報。緊急警報。新宿区：」

○歌舞伎町・一番街

晴れていた空が、急に暗くなる。  
空に黒雲のようなものが広がっていく。  
雲に似ているが雲ではない。パラパラ  
と、小さい黒と黄色の斑模様の粒が雲  
のようなものから落ちてくる。それは  
雨粒のように、次々と落下する。  
雨粒のようなそれは、すべてバツタ。  
カラスがたくさん集まってくる。競い

あうようにバツタを啄んでいくも、逆にバツタがカラスの体を覆いつくしていき、カラス達が悲鳴をあげる。

○針山の部屋・ダイニングルーム

針山、ダイニングテーブルに置いてあるスマホをとり、慌てて玄関の方へ。  
針山「待って。待ってママ」

○同・玄関

潤、靴を履く。

潤「だから、呼ぶなっ」

針山の声「待って。外はダメだ。バツタが来るんだ。バツタ、ママの大嫌いな」

針山、片手でスマホを操作しながら玄関まで走ってくる。反対の手には包丁。

潤「は？何言ってるの？」

針山「ほんとだよ。だから電車も車も止まっ

てたの」

潤「もっとマシな嘘つけないの」

針山「ほんとなんだってば。ママ」

潤「あのさあ、何度言えば……」

潤、立ちあがる。

針山「ほら」

針山、スマホ画面を見せる。歌舞伎町のライブ映像。カメラの前を横切る無数のバツタ。

潤「ぎゃああ。バツタ、バツタあ」

潤、腰を抜かして尻餅をつく。両腕にぶわーっと蕁麻疹が出て、気絶。

針山「だ、大丈夫？ママ、ママ」

○同・ダイニングルーム

針山、キッチンで包丁を洗う。その間、ルンバが床を掃除している。

針山、包丁を拭くと、

針山「うん。これでよし」

包丁を棚にしまう。

潤、ダイニングテーブルの横に、死体のように無造作に寝かされている。ル

ンバが潤の体にぶつかり、軌道を変え  
る。

針山、潤のそばにしゃがみ込む。

針山「ママ。おい、もしもし、もしもし」

針山、おっかなびっくり、潤の頬をつ  
つく。

潤、反応なし。

針山、真顔で潤の頬をつねる。数秒、  
つねっている。その間、にこりともし  
ない。そしてテーブルに置いてあるス  
マホをとる。歌舞伎町のライブ映像。  
バツタがびっしり。気持ち悪い。  
針山、いつものひと懐っこい笑顔に戻  
って、

針山「なんか、漫画みたいだなあ」

針山、スマホの画面を指差して、

針山「あ、トノサマバツタかあ。纏がいたら

喜んだろうなあ。一匹、記念につかまえに

行こっかな」

潤「うーん」

潤、目をさます。

針山「あ、起きた？大丈夫、ママ？」

潤「…なんなの？さっきの」

針山「バツタが大量にきてるの。三陸で大発生したのが東京まで来てるみたい」

潤「意味わかんない」

針山「ほんとだよ。ほら、もう、こんなに」

針山、スマホの画面を見せる。

潤「ぎゃああ」

針山、慌ててスマホを隠す。

針山「ごめん」

針山、またスマホを見る。平気な顔。

潤「…気持ち、悪くないの？」

針山「ぼく、昆虫好きだから。子どもころの夢は昆虫博士だったんだよ。ファールブル的な。いつか、フランスにあるファールブルの記念館に行きたいなって思ってるんだ。来年くらい長いお休みとっていいこっかな」

潤「…」

針山「なんか、渋谷とかもすごいみたい」

潤「見せたら殺す」

針山「見せないよお」

針山、スマホを操作している。

潤「なんか、勝ったと思ってる？」

針山、目をキラキラさせながらスマホを操作。

針山「すごいなあ。SF映画みたいだなあ」

潤「ちよつと、聞いているの？」

針山「うわあ、すごいすごい」

潤「コラッ、聞いてんのかッ」

針山「わっ。何？何？」

潤、針山を睨む。

針山「なんで怒ってるの？ママ…あ、ごめん。もう言わない約束だったのに。ごめん、ほんとごめん。なんか、何に謝ってるか自分でもよくわかんなくなってきたよ。でもごめん。ごめんね、ほんと」

針山、笑う。

潤、顔をそむける。

潤「ほんと、最悪」



針山「ごめん」

潤「なんで、あなたなんかと一緒にいないといけ  
ないのよ」

針山「ごめん」

駆動している冷房。

○歌舞伎町・一番街

電線の上、次から次にバツタ。焼け焦  
げて地面に落ちていく。それでも狂っ  
たように電線に群がるバツタ。ついに  
電線がちぎれてしまう。

○針山の部屋・リビング

停電。室内灯、冷房の電源が落ちる。

針山「あ、あれ？」

潤「何？どうしたの」

針山「ぼく、ブレーカー見てくるよ」

○同

T・「二時間後」

蝉時雨。

窓を全開にしている。網戸も開けている。(まだバツタが来ていない)  
針山、ベランダに半身を出して座っている。頬からしたたる汗。団扇であおいでいる。

針山「あちい」

潤、針山から離れた所で体育座りをして目を閉じている。

針山「あついよお。死ぬよお」

ベランダから、一匹の虫が飛び込んできて、リビングの壁に止まる。トノサマバツタである。

針山「あ」

針山、潤を見る。

潤は目を閉じている。

針山、そーっと立ち上がり、抜き足差し足で虫が止まっている壁の方へ。

針山、迷わず素手で虫を捕まえる。バツタを持ち上げ、綺麗な宝石を見る

ようにまじまじと見つめる。

針山「うわあ、やっぱり綺麗だなあ」

針山の目の前を横切る小さな影。また一匹、入ってくる。

針山「あ」

今度は、ダイニングルームの壁に。

針山、壁の方へ抜き足差し足向かう。

× × ×

針山、窓の外に2匹を出す。

ほっとして振り返り、ぎよっ。

潤のすぐそばのソファに一匹。

バツタ、もそもそと潤の方へ近づいて

いく。

針山、目が飛び出んばかりに驚く。

バツタ、じりじりと近づいていく。

針山「（小声で）待て、待ってえ」

針山、一気に近づこうとして転ぶ。

ドターンと大きな音がする。

針山、恐る恐る顔をあげる。

潤、うつむいたまま動かない。

針山、バツタを捕まえると、抜き足差し足でベランダの方に行き、網戸をゆつくりと閉めて、振り返る。バツタを手にもったまま大きく息を吐く。手を緩めた瞬間、左手にもつてたバツタが飛んでしまう。

針山「あ、しまった」

しかも潤の方へ飛んでいってしまった。

針山「わあ。やばいやばい」

○（回想）ジム・風呂場の脱衣所（夜）

T・「7年前」

潤、体重計に乗る。

顔が青ざめている。

潤「明後日、大会なのに…あと3キロなんて

無理だよ」

○（回想）同・サウナの中（夜）

潤、体育座り。自分の腹を見ながらぶつぶつ言っている。

潤 「コイツのせいで、私の人生台無し」

潤 、目を閉じて、

潤 「死ね、死ね、死ね、死ね、死ね」

女性たちの悲鳴が響く。

針山 、サウナのドアを開ける。

針山 「潤ちゃん。ダメだって」

警備員が駆け込んでくる。

警備員 「あんた、何やってんだ。ここは女風

呂だぞ」

針山 「潤ちゃん。お腹の赤ちゃんが、潤ちゃ

ん。潤ちゃん」

針山 、警備員たちに取り押さえられる。

### ○元の部屋

針山 、潤のすぐ傍でバツタを掴み、ほ

つと息をつく。

潤の頬を伝う汗。

針山 、顔に？マークが浮かぶ。

潤の顔、汗に交じって涙が見える。

○（回想）ネットカフェ・個室（夜）

纏、潤に背中を向けて寝ている。

纏の頬を伝う涙。

潤、拭こうとするも手が止まる。

潤、自分の手を見る。その手が震えて

いる。

纏の素足のくるぶしの辺り、泥で汚れ

ている。そして汚れはパジャマの裾ま

で達している。

潤、そのことに気付き、顔を覆い、声

を殺して泣きはじめる。

纏、そつと目を開け、心配そうな顔を

するも、ぎゅつと目を閉じる。

○元の部屋

針山、潤のそばに顔を近づける。

潤、ぱつと目を開ける。

針山「あ、ごめん」

潤「な、なんなのよ。気持ち悪いなッ」

潤、針山を力いつぱい突き飛ばす。

針山、手を離してしまい、もっていた  
バツタが空を飛ぶ。

潤、バツタに気づく。

潤「ぎゃあ」

潤、逃げ惑う。

針山、立ちあがりバツタを追いかける。

× × ×

窓の閉まったりリビング。

針山、滝のような汗。

潤、子供部屋の入り口で体育座り。

窓に、コツコツと小石のようなものが

当たる。

針山「あー、暑い。死ぬよお」

潤「……」

針山「暑い。死ぬう」

潤「死ねば」

針山、潤を見る。

潤「さつきから、死ぬ死ぬってうるさいな」

針山、潤を見て笑顔を浮かべ、

針山「そう言えば、ぼく、ほんとに死んじゃ

うんだ」

潤「は？」

針山「うつつむいて苦笑いを浮かべ、

針山「末期のガンなんだってさ」

潤「つまんない。そういうの」

針山「一昨日、見つかった」

潤「漫画かよ？」

針山「ほんとだね。漫画かよ、って思ったよ」

潤「暑いんだから黙って」

針山「：」

潤「そういうの、ほんとつまんない」

針山「：」

潤「て言うか、マジなの？」

針山「うん。マジみたい」

潤「どこ？」

針山、潤を見上げて笑う。それまでと

何も変わらない笑顔で、

潤「場所。癌の」

針山「さて、どこでしょう？」

潤「おまえ、嘘ついたな」



針山「ほんとだっつてば。臍臓癌。余命3ヶ月。もって半年だっつて」

潤「100パー、ウソ」

針山「へへ、やっぱ信じてもらえないよね」

潤「いっつもヘラヘラしてるからでしょ」

針山「しようがないよ。癖だもん」

潤「ふざけんな。バカ」

針山「幸せは、笑顔にしか宿らないんだ」

潤「ソレ、教えてくれたお母様には言ったの？」

針山「えへへ。まだ言っていない」

潤「バカなの？先にそっちでしょ」

針山「纏と一緒にどっか行っちゃったんだもん

ん」

潤「行っちゃったんだもんって何？纏になん

かあったら、ただじゃ済まさないから」

針山「大丈夫だよ。お母さまと一緒にだから」

針山の安心したような笑顔。

潤、何か言おうとするも止めて、ぷい

と横を向く。飛び散る汗。

潤「…で、一人で死ぬんだ」

針山「えへへ。そうみたい」

潤「太陽神様に頼めばいいじゃん」

○同・全景

空には太陽。しかし空を舞うバツタの群れが、だんだん太陽を遮っていき、今にも見えなくなりそうである。マンシヨン前のアスファルトに陽炎。

針山の声「太陽神様は、人間に仕えてるわけじゃないから」

○同・リビング

潤「お母様に仕えてるんじゃないの？」

針山「お母様が、仕えてるんだよ」

潤「どっちでもいいよ。癌なんて吹き消してもらいなよ。まさか、できないとか？」

針山「太陽神様にできないことなんてないよ」  
潤「じゃあ、やっってもらいなよ」

針山「無理だよ。太陽神様は、みんなに平等なんだ。だから神様なんだよ」

潤「意味わかんない。じゃあ信じる意味ないでしょ？」

針山「見返りを求めちゃいけないんだ」

潤「なんか、あの人と宗教のことになるとちやんと喋るね」

針山「そ、そうかな？」

潤「ほんとに死ぬの？」

針山「：うん。ごめん」

潤「何に謝ってるのかわかんないけど」

針山「えへへ」

潤「：マジなの？」

針山「うん。マジ」

潤「マジのマジのマジなの？」

針山「うん。マジの、あと何回言ってくれたっけ？」

潤「いいいから。そんなことどうでも。病院は？  
すぐ入院しないと：」

針山、首を横に振る。

針山「治療、やるだけ無駄だったさ」

潤「無駄って。生きなきゃ」

針山「あと3ヶ月だよ」

潤「なんでもっと早く気づかないのよ。どこまで鈍感なの」

針山「ちつとも痛くなかったんだよ。ほんとに。ほんとなんだってばさ」

潤「死ぬんだ」

針山「：へへ」

潤「ほんとに、マジなの？」

針山、うつむいたまま動かない。笑顔のまま。

潤「ねえ、ほんとにほんとにマジなの？」

針山、顔をあげて笑う。  
窓に、コツコツと小石が当たるような音だけが響く。

### ○同・全景

ついに、バッタの群れに遮られた太陽。  
停電もあり、あたりは昼間なのに真っ暗になる。

潤の声「なんでよ。あの人、言ってたじゃない

いのよ。あなたは死なないんでしょ？ずっと  
と元気で暮らしていけるんでしょ？10  
0歳まで生きられるんでしょ？」

○同・リビング

潤「太陽がカラスかわかんないけど、未来が  
見えるんでしょ？あなたの未来は、そうだ  
ったんだよね？」

針山「うん」  
潤「嘘だったんじゃない。全部、嘘だったって  
ことじゃん」

針山、うつむいて苦笑する。

潤「どうして…どうしてそれでも責めないの」

針山「…」

潤「どうして、信じていられるの？」

針山「…」

潤「どうして…そこまで好きでいられるの？」

針山、力なく首を横に振る。

針山「違う。違うんだよ。ぼくは…君が思っ  
ているよりも、もっとずっとダメな奴なん

だ」

潤「∴」

針山「動けないだけなんだ。いつもそうなんだよ。何かが起きてても、何もできない」

潤「∴」

針山「ただ、その場で立ち止まっていることしかできないんだ。そういう奴なんだ」

潤「でも、死ぬんだよ。死ぬの。消えちゃうの∴この世から」

針山「だからね、ママが∴潤ちゃんが羨ましかった。ずっと」

潤「今、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。病院、行かなきゃ」

針山「今は、無理でしょ」

潤、針山のそばまで行くと、針山の腕をつかみ、立たせる。

潤「いや、行く。立って」

針山「だって、バツタでいっぱいだよ」

潤「いいいから。立って」

針山「マ∴潤ちゃん。ほら」

針山、ベランダに続くカーテンを開ける。バツタがビツシリくつついている。潤、仰天。腕に蕁麻疹が出て、針山を掴んでいた腕から力が抜けて気を失いそうになる。

針山「あ、ごめん」

針山、すぐカーテンを戻す。

潤、気絶する直前でぐっと堪える。腕に力が戻り、針山の腕を力強く掴む。

針山「じゅ、潤ちゃん」

潤「い、行くよ」

潤、玄関の方を向いて歩こうとする。

針山、潤の手をゆっくりとはがし、

針山「いいんだ。もう」

潤、針山の方を振り返る。

針山「ありがとう。ほんと」

潤、針山を見る。

針山、窓の方を見て、

針山「屋上菜園も、もうダメかもなあ」

潤「え？」

針山「いや、バツタは植物なら何でも食べちゃうから」

潤「あ、まずい。タカラモノ」

針山「え？」

潤「守んなきゃ。纏と約束したんだ」

○（回想）屋上菜園

T・「2カ月前」

プランターにプチトマトの苗。

纏がプレートに文字を書いている。プランターに差し込むと笑顔で振り返る。

纏「ママとぼくの宝物だよ」

潤「うん。トマトができたら一緒に食べよう

ね」

纏「うん」

潤、纏に頬を寄せる。二人のうれしそうな顔。

○元の部屋

潤、部屋を出ていこうとする。



針山「どこ行くの？」

潤「屋上」

○同・外廊下のある階段

バツタが所々にいる。

潤、立ちすくんでしまう。

針山「大丈夫。ぼくが行ってくるよ」

針山、のぼろうとして顔を歪めてうず

くまる。針山、腰のあたりをおさえ

いる。

潤「だ、大丈夫？」

針山「あれ？なんか、ごめん。あれ、ちよっ

とだけ痛い」

潤「病院。救急車。誰か、誰か助けて」

潤、他の部屋に向かって叫ぶも反応が

ない。

潤「誰か、助けて。ここに病人がいます」

針山、脂汗を流しながらずっと笑顔。

潤「誰か。誰かあ」

潤、また叫ぼうとしたところ、

針山「いいよ、いいって」

潤「何言ってるの。誰か…」

針山「（遮って）無理だよ」

潤「諦めたら、そこで終わりだよ」

針山「潤ちゃん。大丈夫になってきた。ぼくが行ってくるよ」

針山、脂汗を流しながら立ちあがる。

潤「いいから、行かなくて。いいから行くな」

針山「でも」

潤、マンションの外へ出ていく。

○同・マンションの外

ベランダとは反対側。まだバツタがない。

潤、見上げる。7階建て。

潤「登る」

針山「ダメだよ。落ちたら死んじゃう」

潤「いいから」

針山「鉢植えなんていいじゃないか」

潤「ダメ。あの子と私の宝物なの」

針山「ダメだって」

潤「離して。時間がない」

潤、針山を突き飛ばす。

針山「あ、いたっ」

潤、針山を見る。

潤「ごめん。ちよっと待ってて」

針山「潤ちゃん」

潤「あなたのこと助けるから」

針山「ぼくはもう……」

潤「助けるからッ。待ってて」

○同・屋上菜園

バツタが一匹、飛来。

○同・マンションの1階〜2階

潤、ベランダに足をかけて上っていく。

手すりを持つ手。つるつと滑って落下。

○同・1階

潤、床に腰を打ち付ける。

潤 「いたッ」

針山 「潤ちゃん」

針山 、まだ痛そうに腰を抑えている。

潤 「大丈夫。大丈夫だから」

潤 、自分の指を見る。手の皮が破けている。

潤 「7年もやってないと、こんなダメになる

もんなの。」

針山 「ダメだよ。やめよう」

潤 「あっちの方が無理だから」

針山 「ぼ、ぼくが行くから」

針山 、立ちあがろうとして、痛みにし

やがみ込んでしまう。

潤 、ベランダに足をかける。

○ 同 ・ 階段

どんどんバツタが増えていく。

○ 同 ・ 3 ～ 4 階のベランダ

潤 、のぼっていく。

潤のそばをバツタが飛び交っている。  
潤、次の手すりに手を伸ばした瞬間、  
手の甲にバツタが止まる。  
潤、全身に怖気。そのまま手を離して  
落下していく。

○同・1階

潤、左腕を強打。

潤「いたあ」

針山「マ、ママ」

針山、腰を抑えながら駆け寄っていく。

潤「痛い。痛い」

針山「ママ、動かないで」

潤、なお立ち上がろうとする。

針山「ダメだって。ぼ、ぼくが行くから」

○同・階段

バツタがどんどん増えていく。

○同・マンションの前

針山「ママは待ってて」

潤「私もつれてって」

針山「でも」

潤「行く」

潤、腕の痛みをこらえながら、まっすぐ針山のことを見る。

針山「じゃあ、こうしよう」

針山、潤を抱え込む。

潤、驚く。

針山「目、閉じてて」

○同・階段（1階）

針山、潤を抱き寄せながら、潤は左腕を抑えて目を閉じている。

針山「大丈夫だから、目閉じてて」

潤「…」

針山、潤を抱えて階段を上っていく。  
針山「だ、大丈夫？ママ、腕痛くない？あ」

バツタが飛んできて、潤の髪に止まる。  
針山、バツタを片手でつまむと放り投

げて、

針山「あっちいけ」

針山、潤を抱えたまま階段を上り始める。

○同・3と4階の踊り場

針山、潤を見て、

針山「ママ。大丈夫？腕？」

潤「…」

○（回想）クライミング会場・舞台袖

T・「7年前」

針山の胸に抱かれている潤。

潤の心地よさそうな顔。

○元の階段

針山「ママ？ママ？」

潤「…う、うるさいな。大丈夫なわけないで

しょ」

針山「…」

潤、薄目を開ける。

針山、真剣な顔で階段を上っている。

潤、どきっとして目を閉じる。

○同・屋上

針山、潤を抱えて屋上菜園に入る。

針山「あっ」

バツタがうじゃうじゃいる。菜園を先を争うようについばんでいる。

潤、うつむいて顔を隠したまま、

潤「トマト。トマト」

針山「トマトね」

針山、潤を離して探す。

潤の肩にバツタが止まる。

潤「ぎゃあ」

針山「あ」

針山、潤のところへ戻り、バツタをとる。

針山「あっちいけえ」

潤「早く。トマト、トマト」



針山「うん。ごめん」

潤の頭にバツタ。潤、暴れる。

潤「ぎゃああ」

針山、戻ってきてバツタをとろうとす

るも、潤に頭突きをくらう。

針山「いたーい」

針山、尻餅をつく。もうすでに潤の頭

からバツタはいないが、潤はぎゃあぎ

ゃあ言って暴れつづけている。

○同・リビング

トマトのプランター。

潤、左腕に包帯をしている。

潤、プランターのトマトを見て、

潤「ちよっと、かじられてる」

針山「ご、ごめん」

潤「…」

針山「ごめんね」

潤「あ」

針山「な、何？」

潤 「病院、行かなくちゃ」

針山 「あ、そうだ。腕」

潤 「違うって。そっちそっち」

針山 「え？ぼく」

潤 「そう。ガン」

針山 「：ああ」

潤 「行こう」

針山 「いいよ」

潤 「いいから」

針山のスマホに通知。

針山 「あ、纏くん」

潤 「何？」

潤、針山のスマホを覗き込む。

教団の公式サイトでライブ配信。

### ○裁判所・屋上

京子と纏。纏も京子と同じように真っ黒な服を着ている。そしてたくさんの信者たちがいる。その中に、業務用のビデオカメラを構えた信者の姿も。

信者たちは、バツタの群れに怯えてい  
る。

カラスもたくさんいる。

京子「太陽神様。どうか私たちをお救いくだ

さい」

カラスたちがぎゃあぎゃあ鳴く。

上空を行きかうバツタの群れ。すでに

床のあちこちにいる。

信者たちの体にもバツタがまとわりつ

き、振り払う姿がある。カラスたちも、

苦しそうな悲鳴をあげている。

信者「先生。危ないです」

京子「何を言うの。今こそ、信仰が試されて

いるのよ。太陽神様、どうか」

○針山の部屋・リビング

針山のスマホを覗き込む潤と針山。

潤「ここ、どこなの？」

針山「ど、どこだろう。あ、でもあそこかも」

潤「あそこってどこ？」

針山「裁判所」

潤「今すぐ行って」

針山「え？」

潤「もういい」

○同・玄関

潤、靴もはかずに飛び出ていく。

○同・外廊下

バツタがうじゃうじゃ。

潤「ぎゃあああ」

潤、気を失い倒れかけたところを針山が受け止める。

針山、潤を室内に引っ張り込む。

○同・玄関

潤、頭を抱えながら、  
潤「お願い。今すぐ行って」

針山「でも……」

潤「お願いだから」

針山「マ、ママ……」

潤、泣きだす。

針山「わかったよ。車、回すから」

○同・外廊下

針山、潤を抱えて出てくる。

潤の上半身をゴミ袋で覆っている。

○針山の運転する車内

真っ暗な中、ヘッドライトをつけて走っている。

潤、後部座席で頭を抱えている。

針山、運転しながら痛み顔に顔をしかめ

て腰を抑える。

ワイパーはずっと動いている。バツタ

が雨粒のようにワイパーに引っかかる。

○裁判所・全景

「裁判所」と刻まれた石碑にも、バツタがいつぱい。

○同・屋上

信者「先生。もう止めましょう」

京子「出ていきなさい」

信者「せ、先生」

京子「太陽神様を信じれない者は、出ていけ」

信者たち、顔を見合わせてから、一目散に逃げていく。

纏、京子を見上げる。

纏の体にも、京子の体にもバツタが何匹もくつついている。

京子、纏のことを見ず、ぶつぶつと呪文らしきものを唱えている。

あちこちでカラスの悲鳴が聞こえる。カラスの1匹が飛び立つと、続々とカ

ラスが逃げ去っていく。それでも、京子は逃げずに呪文を唱え

ている。纏、空を見上げる。空はバツタで真っ

暗。

○同・駐車場

針山の運転する車が停まる。

○針山の運転する車・車内

針山「着いたよ」

潤「行く」

針山「でも、バツタでいっばいだよ」

潤「行く」

針山「ちよっと待ってて。中、入れるか見てくるから」

針山、出ていく。

× × ×

針山、戻ってくる。体にバツタをつけて。

針山「ママ。ダメだ。どこも開いてない」

潤、顔をあげる。窓にバツタがいっばい。

潤「ぎゃああ」

潤、手から力が抜けて失神そうになる。

○（回想）ネットカフェ・個室（夜）  
纏の寝顔。涙のあと。

○元の車内

潤、踏みとどまり、カッと目を見開く。

潤「負けない。負けてたまるか」

潤、ドアを押し開ける。

○同・駐車場

潤、まっすぐ前だけを向いて歩いていく。びゅんびゅんと周囲をバツタが飛び交う。

針山、追いかけてくる。

針山「ママ。ダメだって」

潤「あの子を守らなきゃ」

針山「待ってってば」

潤「あの子を守るの」

針山「どこからも入れないんだって」

潤、建物を見上げる。

1本の通気口が、建物の天井から地面



にかけて取り付けられている。

潤「登る」

針山「じよ、冗談でしょ」

潤「登る」

針山「無理だよ。今度こそ死んじやう」

潤「死なない」

針山「死んじやうって」

針山、潤の腰に縋りついて泣き出す。

潤「死なない」

針山「お願いだよ。やめてよ。君が死んじや

つたら、ぼくはどうしたらいいんだ」

潤、針山を見る。

それまで血走っていた目を、たおやかに緩ませる。そして、それまでなら力任せに殴ることしなかつた手で、そつと針山の頭に触れると、

潤「大丈夫。私は死なないから。あの子のた  
めにも、そしてあなたのためにも」

針山、涙を流しながら目を見開く。潤  
を見上げると、優しいままなざしで通気

口を見上げている。

○同・通気口

潤、片手でのぼっていく。

目の前にバツタが止まる。

潤、滑って落ちそうになるも、寸で

停まる。

針山「あ、ママ」

もう、地面から5mは登っている。

○同・1階

針山、痛そうに腰を抑えながら、見上げて  
げている。

針山「ぼ、ぼくが守るんだ。落ちてても、絶対、  
ぼくが守るんだ」

潤が落ちてくる。

針山「あ」

潤を受け止める針山。

ボキンと腕の骨が折れる音。

針山「あいたあ」

潤 「ごめん。大丈夫？」

針山 「痛い痛い痛い痛い」

潤 「ごめん」

針山 「折れた。腕、折れた」

潤 「あら？お揃いお揃い」

針山 「痛いよお。お母さまあ」

潤 「逆に、ガンのこと忘れちゃうんでない」

潤 、もう一度、通気口を見上げる。

潤 「見とけよ。このヤロウ」

潤 、のぼっていく。

針山 、痛みに転げまわっている。

針山のポケットに入っているスマホが

緊急速報を鳴らす。

機械音 「まもなく、新宿区に防虫剤を散布い

たします。区民の皆様、窓をしめて室内に

おはいりください」

針山の驚いた顔。

機械音 「人体にも有害なものです。決して吸

わないようにお願いいたします」

針山、見上げる。

潤、すでに4mほど登っている。

針山「マ：ママ」

○同・屋上

京子、ぶつぶつ唱えている。

遠くから何台ものヘリコプターの音が

近づいてくる。

纏、空を見上げる。バツタで覆いつく

されている空が、白い粉雪と共に少し

ずつ晴れていく。

纏「あ、雪だ。おばあちゃん雪だよ」

空から降る白い粉を浴びて、小石のよ

うに空から落ちてくるバツタ。

京子、纏に答えずぶつぶつ唱えている。

○同・通気口

潤の顔にバタバタと落ちてくるバツタ

の死骸。

白い粉が空から降ってくる。

潤、まともに吸う。

ふっと意識が遠くなり、通気口をもつていた手から力が抜ける。そのまま頭から真っ逆さまに落ちそうになった寸でのところで、左足が通気口の留め具に引っかかる。

○同・1階

針山、白い粉で蒸せている。

少しずつ晴れてくる視界。

潤が、10mも上で、意識を失いぶら下がっている。

針山「マ、ママ」

○同・通気口

潤、意識を失っている。

○同・1階

針山「ママ。ママ：潤ちゃん、潤ちゃん」

潤、動かない。

針山「起きて。起きてえ。うっ」

針山、腰を抑えてその場に倒れてしま  
う。そのまま意識を失う。

○同・屋上

大量の白い粉。バツタの死骸。  
そして気を失って倒れている纏と京子。  
纏、うわごとのように、

纏「…ママ…ママ」

○同・通気口

潤、目を覚ます。  
その拍子に左足が留め具から外れる。  
まるで猫のように体勢を入れ替えると、  
両腕で通気口をつかむ。留め具に右手  
の指が引っかかり、出血。

潤「ああああ」

潤の悲鳴が、街中に響き渡る。包帯か  
ら出た左腕ががくがくと震えている。  
潤、歯を食いしばる。そして登ってい  
く。

○同・屋上

潤、フエンスをよじ登り、現れる。

潤、倒れている纏に駆け寄って、

潤「纏。纏」

潤、纏を抱き上げる。

潤「纏。纏」

纏は目を覚まさない。

潤「纏。起きてッ。纏」

纏、ぴくりともしない。

潤「纏。ダメ、死んじゃ嫌。纏、纏」

潤「ごめん。ママ、ウソついてた。纏にウソ

ついてた」

潤、ボロボロと泣く。

潤「ごめん。ママを許して。ママを許して」

纏、まるで人形のように動かない。

潤「纏が生きてさえいれば、もう何もいらな

いから：何もいらないから」

纏、動かない。

潤「どんなに遠くにいてもいい。もう二度と

会えなくたっていい。生きてて。お願いだから、ただ生きてて」

上空を漂っていた白い霧が、だんだん晴れてくる。

潤 「お願いだから。纏：纏い」

そばで倒れている京子。

○同・1階

針山も気を失って倒れている。

○同・屋上

新宿の街並。

白い霧が晴れてくると、その隙間から太陽の光が差し込んでくる。

○同・屋上

潤、泣きながら纏を抱いている。

纏、咳をする。

潤、目を見開く。

潤 「纏？ 纏？」



纏、苦しそうに咳をする。

潤、纏の背中をたたく。バシバシ叩く。

纏、むしろそちらが苦しそうに咳をする。  
る。

纏、ゆっくりと目を開ける。顔は白い  
粉でいっぱい。

潤、手で纏の顔についた粉を乱暴に払  
いのける。

潤「纏。纏」

纏「マ、ママ」

潤、泣き笑いで、

潤「纏。良かった。良かった」

潤、纏を抱きしめる。

纏、苦しそう。潤にされるがまま。

京子、咳をする。

纏、京子の方を見ようとする。

潤は、纏を抱きしめて離さない。  
京子、苦しそうに咽ぶ。

地面に白い粉をかぶって横たわって  
る業務用のカメラ。「REC」ボタンが

赤く光っている。

○同・1階

京子の声「なんで、あなたがココにいるのよ」

潤の声「纏を返してもらいにきたんです」

針山、目を覚ます。

傍のスマホから潤と京子の争う声。

京子の声「何度言えばわかるの。纏ちゃんは

あなたのものじゃないわ」

潤の声「あなたのものでありません」

京子の声「なんですって。その口の利き方な

んとかならないのッ」

針山「やめなつて：世界中の人が見てるんだ

から」

画面上には、視聴者者325万の文字。

○葬儀場・全景

T・「1年後」

○同・会場内

針山の遺影。

泣きじゃくる針山京子（98）と、京子と並んで泣いている針山纏（7）。

○同・外の通り

針山潤（37）喪服姿で歩いている。

腕に包帯はしていない。

山の中にある葬儀場。空をトンビが舞っている。

潤、空を見上げて、

潤「頑張って半年：でも1年も生きれた」

潤、笑顔を浮かべて、

潤「あなたにくせに、頑張ったじゃん」

潤、顔がゆがむのを無理矢理こらえる。

目の前に一匹のバツタ。

潤「今、出てくんなよ」

潤、身構える。全身に怖気。足が震え出す。

その時、どこからともなくカラスが降りてきて、バツタをぱくつとくわえる。

バツタ、じたばたと暴れる。

カラスは、首を傾げて潤の方を見る。

纏の声「ママ。ママあ」

潤、振り返る。

潤「うん。今、行くねえ」

潤、纏に向かって手を大きく振る。

潤、カラスを見る。カラス、まだ潤を

見ている。バツタは息絶えたのか動か

なくなっている。

潤「あ、ありがとうなんて言わないから」

潤、振り返り葬儀場に戻っていく。

潤「（呟くように）ありがとう」

カラス、バツタをくわえて飛び去って

いく。